

日本古典文学におけるいぬ

— 近世俳諧の戌・犬を中心に —

東 聖子

序

近世初期頃の辞書である『易林本節用集』には、十二支の条に「戌」^{ジユツ}、気形の条に「犬、狗、尨」^{イヌ}とある。現代の『角川古語大辞典』のいぬの「戌」項には、「十二支の一。時間では午後八時を中心として、その前後各一時間の間。……方角では西北西」とある。

関連語としては、「いぬ亥子丑寅」という呪文があつて犬に追われたり囲まれたりした時、これを唱

えると退散させることができるという。また、「戌の時」の用例には『土佐日記』の発端で「十二月の二十日あまり一日の日の、戌の時に門出す」とあつて、貫之はこの紀行文を午後八時前後に出立させている。

ところで、十二支獣としては「犬」が当てられている。江戸時代の草双紙に『陰陽十二支記噺』（明和八年正月刊）という楽しい初春の絵入りの読み物がある。ストーリーは、寅の娘初日の前（子）と卯之介は恋仲。巳之介が横恋慕する。初日の前の下僕

きゃん介（戌）が姫の手紙を卯之介に届ける途中、

申介が奪う。その手紙を髪結のひつぢが食べる。辰は巳之介の父、酉は卯之介の下男。結局、中立の亥や丑が、大黒天と弁財天に願ひ出て、二神の仲介で仲直り。十二支で噺を作つてめでたしで終わる。絵師は鳥居清満。十二支の各動物がふさわしい役柄で登場する。凶Iは、姫君の手紙を、下僕のきゃん介（戌）が届けるところだが、犬猿の仲と言われる申は手紙をねらつて縁の下にいる。ここできゃん介の袖の紋は戌であり、着物の模様は縄である。ここでも戌は犬である（『大東急記念文庫善本叢刊・赤本黒本青本集』汲古書院刊）。

また、妊婦が五か月目の戌の日に、腹帯をする慣習があるのは、俗に犬は多産で安産と信じられているからである。ここにも、十二支の「戌」が犬に当てられていることが確認される。

これから日本文学、特に近世の俳諧における（いぬ・戌・犬）について眺めていきたい。

日本の古典文学といぬ

日本における犬は、縄文時代の遺跡から骨が発見され、弥生時代の銅鐸にも凶があるという。上代では儀礼や軍事力の役割もあり、中古には貴族社会においての鷹狩り用の犬として、またペットでもあり、野犬の横行もあつたという。犬には穢（けがれ）の面とともに、異常を見破る力も有していた。中世武士の世界では、狩猟に用いられ、北条高時が闘犬を愛したこ



▲図I 『十二支記噺』

とは有名である。だが、犬追物などの虐待対象ともなった。日本における上代から中世までの犬と日本人の歴史は陽と陰、聖生と野生などの、プラス・マイナスの両面があったようだ。

日本の古典文学に登場する犬のうち、『日本書紀』『古事記』に白き犬などがあり、『万葉集』の和歌にも出る。中古の『源氏物語』の「若紫」の巻、源氏十八歳の病の折、北山の風光の中で、可憐な美少女を見る場面だ。

尼君の見上げたるに、……「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠ふせごの中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。

この犬君は雀を逃がした召使いの童女の名。そのほか、「浮舟」の巻に、夜更けて「犬の声絶えず」とあり、夜半の犬の遠吠えがでてくる。『枕草子』には、「上に候ふ御猫は」の段に、一条天皇のもとに伺候しごしている五位として愛玩されていた御猫と対比されて、「翁まる」という犬は打たれて追放され、

後にもどり、哀れを誘う話が出てくる。

そして、中世文学では、説話文学に犬が多出すると、三木紀人氏はいわれる（『國文學―古典文学動物誌』の「犬」の項、學燈社）。また『徒然草』一二一段には「養ひ飼ふものには、馬・牛。……犬は、守り防ぐつとめ人にもまさりたれば、必ずあるべし」とあり番犬としての犬の役割を語っている。

次の泰平の時代、近世には、十七世紀末の徳川綱吉の生類憐みの令があり、また、後期読本では曲亭馬琴著『南総里見八犬伝』の大口マンのなかに、「八房」が異類婚姻譚の著名な犬として登場する。

近世俳諧におけるいぬ

近世は俳諧にも、新年に「戌の年」を詠んだ発句はっく（近代の俳句のこと）がある。

しめ縄や春をもくくる戌の年

作者未詳

残る雪や今朝けしかくるいぬのとし

作者未詳

正月の礼者とがむるいぬのとし

貞徳

犬に逃いぬを追夜のすずみ哉

嵐雪

春や昔だいてあるいた犬の年

保友

〈秋〉

とりははや立て今朝こそ戌の年

良繼

朝がほや垣にしづまる犬の声

白雄

霞にて山やはり子のいぬの年

利邑

犬の声しばし里ありてむら芒

暁台

〈冬〉

これらは、縁語・掛詞などを使って、言語遊戯のな

一あらし犬のと吠や寒の中

巴水

かで、犬の特徴をつかんで詠んでいる。注連縄で新

犬吼る昼も淀野のしぐれかな

成美

年をくぐる、残雪に喜ぶ犬、年始客に吠える犬、酉

市井や野原や川辺で、人々と朝・昼・夜をとにも過

の年の次の犬の年、春霞が山にかかり張り子の犬の

ごしている、その姿や遠吠えの音がさまざまに描写

年……近世初期に作られた鷹揚でのどかなの貞門・

されている。

談林の頃の新年の「戌の年」の発句である。

ここで、芭蕉・蕪村・一茶の犬の句をあげてみる。

「犬・狗」は、季語・季題ではない（江戸時代は

芭蕉は『野ざらし紀行』でこう詠む。

「四季の詞」等と言った。犬は四季の詞ではなく、

草枕犬も時雨るかよるのこゑ

芭蕉

「雑（無季のこと）」であるので、新年（春）以外

時雨のわびしい宿で、旅愁にひたっていると、かす

かに犬の遠吠えが聞こえる。旅の一景である。

他の季節でも詠まれている（尚、傍線は四季の詞

を示す）。

〈夏〉

淀舟や犬もこがるるほととぎす

其角

其角

其角

中興期俳壇の画家でもある蕪村の犬の句は、

春うたた犬君が膝の犬張子

蕪村

であり、前述の『源氏物語』の童、犬君を出し、かわいい童が膝に犬張り子を乗せて遊ぶ、王朝世界を連想させる。円山応挙の狗三匹の絵に暁台の句とともに、賛したものである。

一茶の犬の句は多くて、次の句などがある。

草餅や芝二居て犬を友

一茶

東風吹や堤に乗たる犬の腮

一茶

信濃育ちの一茶は、さまざまな実景を切り取っていて、親しみのある犬の句が多い。

近世俳諧全般がそうであるように、俳諧における犬もまた、初期の言語遊戯的なものから、実景や現実の写実へと推移している。



▲図Ⅱ 鈴木春信〈犬と遊ぶ母子〉

浮世絵ペット展と犬張子

二〇〇五年八月に、太田記念美術館で「浮世絵にみる愛されるペット」展があり、観てきた。江戸時代の浮世絵が描くペットの第一位は猫であった。二代が犬（①愛玩用の「狎犬」、②野犬としての犬）、以下は猿、馬等であった。犬については、美人画などに流行の中国原産の小型で目の大きな狎い犬として描かれていた。手許にあった数種の日本と海外の浮世絵図録を眺めてみると、飼い犬や市中の犬に

小さめのまるい、またはきつね型の、日本種の犬も描かれていた。図Ⅱは、鈴木春信の「犬と遊ぶ母子」でほえましい絵である。

また、犬張子が江戸時代に広く普及した。

春うたた犬君が膝の犬張子

蕪村

くちあけ
口明て春を待らん犬はりこ

一茶

このように蕪村の前述句も、一茶も犬張子を描いている。室町時代に上流社会で作った犬宮いぬみやが、出産のお守りになったことに由来する。夜の魔物を避け、子どもを守るとされ、産屋で嬰兒の枕頭に置き、顔は男子は左向き、女子は右向きという。現在でも、各地で作られている。

犬棒カルタとブルースの犬

江戸時代には、いろはカルタがある。ここにも「犬も歩けば棒に当たる」と犬が出てくる。この意

味は、禍に当たると、福に当たるとの正反対の両義がある。戌の年の初春にあたり、後者の福に当たられることをお祈りする。

また、二〇〇五年九月に映画「トウルーへの手紙」が公開された。監督はアメリカの写真家の第一人者であるブルース・ウエーバーだ。九・一一テロを経た人類へのメッセージである。ブルースは、ゴールデンレトリバー数頭と一緒にニューヨークといくつかの田舎の別荘で生活し、スタッフとともに仕事をする。犬がいるとハッピーで自然な雰囲気の写真が撮れるという。古き良き時代の犬と共存するアメリカを描いた。

霊性と穢性、凶暴と親和が共存する、しかも人間に忠実な動物の犬であるが、二十一世紀の六年目にあたり、「犬棒」カルタの福徳と、ブルースのような愛犬との穏やかな日々がこの地球上に、実現いたしますように。

(十文字学園女子大学短期大学部)